勝福寺縁起

渡辺浩晃

勝福寺と真勝寺

響流山勝福寺は實相山真勝寺（現・真宗大谷派四日市別院）の塔頭（本寺に付随し、その境内に所在し本寺を護持する寺）として歴史を刻んできた。それ故に、勝福寺の縁起を語るためには真勝寺、そして開基の出自である渡邉氏の由来から語らなければならない。

渡邉氏との関わり

1、松浦時代

日本全国が二つの勢力に分かれ互いに争った南北朝時代、肥前国平戸の松浦氏当主に松浦肥前守直がいた。南北朝の争乱は松浦氏においても例外でなく、松浦直は南朝方武将として畿内に上り、楠木氏に従い各地で武功を挙げた。松浦直は南朝方武将として、摂津柳津・中村等を領したが、これらに加え豊前国高家郷常徳を恩賞として得て、地頭職に任ぜられた。

やがて南北朝時代は足利尊氏が奉じる北朝方勝利のうちに終焉した。松浦直は最後の決戦となった千早城攻防戦まで宮方に従い、落城とともに吉野に落ち延びた。ほどなく大内義弘の仲介によって北朝と和議を結んだが、本領・肥前国平戸は北朝方の立場となっていた松浦直の弟・松浦勝に譲ることとした。

2、四日市に定住

弟・松浦勝に本領を譲った松浦直は豊前国高家郷常徳に下向し、土着することとした。そして名を先祖代々の名字、渡邉に復姓し、官名も重代の左衛門府官職に改まり、渡邉左衛門尉直を名乗った。また現在の小倉の池湖畔に狐塚山城を築き、下館として現在の四日市上町に屋敷を置き、名実ともに渡邉直は豊前国四日市の祖となった。

渡邉氏はその後、大内義隆に仕え、代々周防大内氏の麾下として活躍した。大内氏滅亡後は豊後大友氏に仕え、宇佐平野を支配する「宇佐三十六士（宇佐郡三十六人衆）」の一つに数えられる有力土豪として活躍した。

真勝寺の始まり

天正年間（一五七三～一五九三年）、渡邉氏二十一代目惣領 渡邉加賀守統述が家督を弟に譲って出家し、本願寺第十一代顕如上人に帰依して加賀入道専誉（専要）を名乗った。専誉は四日市の南方にある山本の虚空蔵寺跡地に「専誉庵」を開き、この庵が真勝寺の前身となった。

戦国武将であった渡邉加賀守統述がなぜ出家したかについては、資料にその理由を見つけることはできないが、天正六（一五七八）年に大友氏と島津氏の間に起こった日向国耳川の合戦に起因すると言い伝えられている。九州分け目の合戦とも言われる耳川の合戦であったが、大友勢は大敗し、渡邉氏も当主でもある専誉の父、

四日市別院本堂に安置されている専誉像

渡邉和泉守鎮弘が戦死する事態となった。当主戦死の状況を踏まえると、一族郎党の損害は想像に難くない。加賀入道専誉は後継として家督を継いだものの、戦乱の世に無常を感じ、出家したのだという。豊後国は島津氏の侵攻を受け、また北方からの毛利氏による圧迫にも晒されると、大友氏は豊臣秀吉に救いを求めた。これが豊臣政権による島津氏討伐となる天正十五（一五八七）年からの九州征伐に繋がっていった。

本願寺とのつながり

渡邉氏は大友氏麾下の勢力として活躍する一方、同時期に本願寺顕如と織田信長との間に起った石山合戦（一五七〇～一五八〇年）にも参戦している。石山合戦とは、全国制覇を目指す織田信長に抵抗し、石山本願寺に籠城する本願寺第十一世法主・顕如を中心にして全国の門徒が蜂起した戦いである。合戦は実に十一年の長きにわたって戦われたが、最後は朝廷の仲介で和睦に至り、顕如は石山本願寺を信長に明け渡した。（石山本願寺跡地には、のちに豊臣秀吉が大阪城を築城することになる。）

この石山合戦に、渡邉氏惣領家一族の渡邉次郎遠が顕如に従い戦い抜き、紀伊鷺森御坊まで同行していたことが史料より見て取れる。渡邉氏は、専誉以前から本願寺との結びつきを持っていたのである。顕如は先述の九州征伐で豊臣秀吉に従って同行し、下関に滞在しており、これが専誉の顕如への帰依に結びついたものと思われる。

さて、出家や顕如への帰依との前後関係は定かではないが、専誉の開いた「専誉庵」は草創まもなく、戦乱の中で焼亡してしまった。天正六（一五七八）年に大友宗麟がキリスト教に改宗したことに端を発する寺社弾圧や、島津氏の領内侵攻で大友氏の支配が緩んだことによる豪族たちの蜂起により、宇佐平野が激しい戦火に見舞われる中で焼き討ちの憂き目に遭ったのだという。

専誉と良珍

兵火に追われた専誉は、一族で弟子となった良珍を伴い豊後国城島（別府市）や田染蕗（豊後高田市）など在地を変え流浪しなければならなかった。はじめ宇佐平野の争乱に追われ城島に移り、次いで豊後府内を落とし北上した島津氏に追われ、渡邉氏の旧領で縁故のあった田染に移ったものであろう。

なお、この良珍こそ後に勝福寺開基となり、現住職の藤谷氏の祖先となった人物である。勝福寺の住職は現在「藤谷」を名のっているが、それは明治時代に養子を迎え藤谷姓となったからであり、同家は良珍以来、渡邉姓を名乗っていたのである。

やがて豊臣秀吉の九州平定が成り、その後渡邉氏らが黒田如水・長政父子に対し起こした豊前国人一揆も平定され、戦乱が収まる。

真勝寺道場と勝福寺の始まり

専誉は旧地豊前国常徳に帰還し、慶長五（一六〇一）年、真勝寺道場を建立する。ほどなくして専誉はこの世を去り、坊守の妙善尼が後を継いだ。このとき、専誉とともに帰還した良珍は寺役として真勝寺道場を支えていたが、やがて真勝寺塔頭としての勝福寺住持となる。これが響流山勝福寺の開山と考えられる。

真勝寺の誕生

さて、真勝寺道場には専誉の弟で渡邉氏惣領の渡邉左馬頭統政の嫡男、正願が養子に入り、妙善尼に続く三世住持となった。正願は学問の志深く詩歌、連句に長じ、晩年には渡邉氏惣領家の帰依も受け菩提寺して庇護を得た。門徒も急激に増えてゆき、当時開発されたばかりの四

日市集落に寺地を遷した。現在の四日市別院および勝福寺の地がこれにあたる。元和九（一六二三）年、正願は東本願寺第十三代宣如上人より寺号と親鸞聖人御影を申し受け、正式に「實相山真勝寺」を成立させた。以降数代に亘り、末寺二十二ケ寺門徒二千余軒を抱える豊前国でも有数の大寺となる真勝寺が整備されていったのである。

勝福寺の御本尊

平成五（二〇〇三）年、勝福寺本尊を解体修理したところ胎内銘が出てきた。それによれば、建治元（一二七五）年に釈迦仏として造立され、九十一年後の貞治五（一三六六）年に修復されたとある。

今回、寺史を作成するにあたり、専門家に仏像や胎内の銘文を見てもらったところ、「作って百年にも満たないのに、修理するというのはよほど大きな事故か事件で損傷し、修理しなければならない事態になったのではなかろうか。そして、この修理の時に阿弥陀如来に改められたかどうかは、これだけでは判断しかねる」とのことだった。

勝福寺本尊は、かって真勝寺の本尊として礼拝されてきた仏様と言い伝えられているが、その造仏年代は、真勝寺はおろか専誉庵が開かれた年代を遥かに超え、鎌倉時代に遡ることがわかった。

造仏年の建治元年は、渡邉氏が豊前国常徳に来住する以前に肥前国松浦平戸にて水軍として活躍していた年代であり、修復年の貞治五（一三六六）年は渡邉氏が豊前国常徳に封ぜられた年と一致している。渡邉氏が松浦平戸氏を名乗り活躍する中で礼拝した仏様が継承され、豊前四日市に遷った現在も一族の菩提寺の本尊として仰がれているのである。

また造仏された建治年間は、大元帝国が襲来したいわゆる元寇の文永（一二七四）、弘安（一二八一）年間のはざまの時期である。文永の役において松浦平戸氏（渡邉氏）は当主が肥前鷹島で自刃する程の壊滅的被害を被っており、ご本尊は一族郎党の菩提を弔うために造立された可能性がある。

勝福寺の御本尊は七百四十余年の渡邉氏一族の歴史をじっと見守ってきた仏様なのである。

さらに、勝福寺にはもう一つ小ぶりの阿弥陀像が安置されている。それはお内仏の阿弥陀様である。これも今回、専門家に見てもらうと、「この阿弥陀像の方がより古く、鎌倉時代初期の制作であろう」とのことであった。

勝福寺開基の良珍が、専誉と共に戦乱を避けるため、城島や田染等を流浪した時に、この阿弥陀様は良珍の背中に負われた笈（おい）の中に納められて大切に守られていた阿弥陀様ではなかろうか。

真勝寺騒動

元文二（一七三七）年ごろ、真勝寺第十代宗順の不行跡に端を発し、寺中・末寺を二分する騒動が起こった。

真勝寺塔頭勝福寺の了山をはじめとした門末と渡邉惣領家らは度々宗順をたしなめたが、行状は改まらなかった。いつしか寺内、末寺は勝福寺了山をはじめとする寺中派と、宗順をはじめとする住持派に二分され、激しく争う様相と

なる中で、住持派は真勝寺塔頭の勝福寺及び福円寺の戸〆・寺役の停止・御絵讃巻物取り上げという強硬手段に出た。寺中派の人々は法善院宗淳に解決策を仰ぎ、宗順を退隠させ、中津正行寺の新発意を養子として新たに住持に迎えるべく願い出たところ、本山は宗順に隠居を申し付けるとともに、真勝寺を抱寺として引き上げ、住持を輪番制とする裁定を下した。

真勝寺を追われた宗順は森山・教覚寺の恵明により改派し、六年ごとに行われていた宗門改の際に西派僧侶であることを届け出た。そして享保三（一七四三）年に至り真勝寺そのものを真宗大谷派（東派）から本願寺派（西派）へ改派することを企てた。

三月二日、西派僧侶が大挙して真勝寺に押し入り、寺内で両派は問答を繰り広げた。寺は住持の持ち物であり、宗順の改派を以て真勝寺は改派したとする西派に対し、東派は、宗順は手切れの僧であり、宗順の改派は真勝寺に関わりがないとして真っ向から対立する様相になった。やがて問答は境内全体を舞台とした乱闘となり、西派が東派を力により追い落として占拠し、寺および宗順と末寺が転派したものと称した。

日田代官所四日市陣屋と、九州を統括する幕府の出先機関、西国筋郡代はこの状況を追認したため、東派は幕府にこの事態を訴え出た。

江戸幕府の裁きと別院の始まり

騒動は、ときの寺社奉行大岡越前守忠相の裁断により幕を閉じた。寺跡は東派や西派でなく、公儀に没収とされた。宗順らが八丈島へ流罪となるほか、西派の関係者が投獄され、獄死した。この騒動は、のちに「真勝寺（別院）騒動」と呼ばれることになった。

延享元（一七四四）年、真勝寺は東本願寺へ御下付となり、「本山掛所御坊」となった。これが「九州御坊」と称し、全九州の七一六ヵ寺を統括することになる「別院」としての始まりである。

独立寺院としての勝福寺

さて真勝寺が公儀召し上げとなり東本願寺に下付された際、勝福寺はどうなったであろうか。幕府は勝福寺と真勝寺とを同一寺地と見なし、真勝寺同様、公儀召し上げとする意向であった。ところが年貢記録により、以前より独立した納税が行われていたことが立証され、大岡越前守忠相からもう一つの塔頭、福円寺とともに真勝寺とは独立した寺院であることが認められ、召し上げを免れたという資料が残っている。

明治二十三（一八九〇）年に政府が調査した寺院明細牒の勝福寺の項にも「当寺開基は良珍、本願寺十二代教如上人に帰依し今の地に一宇を建立し本宗の末寺となり、そして慶長十二（一六〇七）年、当該法主より本尊・寺号を下付する所なり」とある通り、真勝寺騒動以前より勝福寺は独立性をもった寺院として存在していたと考えられる。

勝福寺と福円寺は、本寺が真勝寺から四日市別院と変わり、それぞれが独立した寺となっても末寺や門徒を管理する塔頭であり続けた。

御許山騒動と東別院

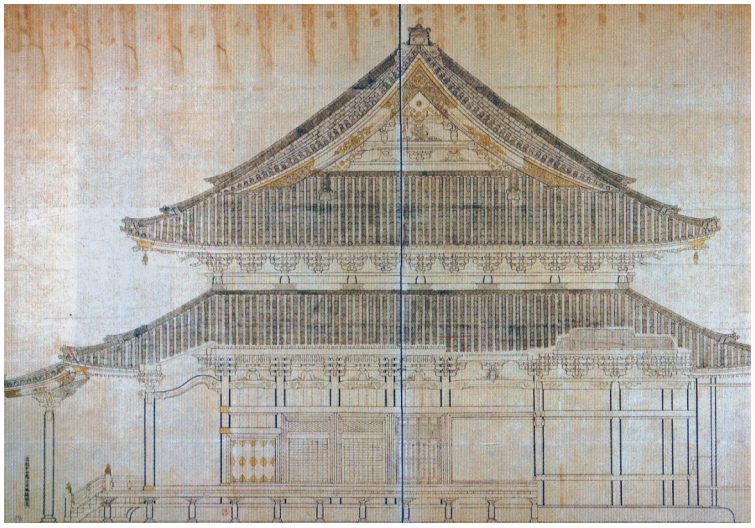
幕末、宇佐郡内川野村の庄屋の子息に歌や国学に秀でた佐田 秀という人物がいた。彼は勤王の志士として討幕計画を練っていたが、これが露見し西国筋郡代に追われ、長州の報国隊に身を寄せていた。

慶應四（一八六八）年一月三日、鳥羽伏見の戦いで官軍が勝利するや、同一月十四日、佐田秀を中心にした豊前の草莽の志士達は藩政に反発する長州藩士十八名と一緒に脱藩して浪士隊を結成し、宇佐に舞い戻ってきた。

六十余人の浪士隊は四日市陣屋を襲撃し、大砲や弾薬を奪って火を放った。世にいう「御許山騒動」の始まりである。陣屋から四日市別院

に逃げた役人たちを追った浪士隊はあろうことか、奪った大砲を横町筋から別院境内に打ち込んだ。重層で威容を誇った別院本堂をはじめとした諸堂、そして福円寺は灰燼に帰した。勝福寺はその渦中にあって運よく類焼を免れている。やがて浪士隊は御許山に錦の御旗を掲げ立て籠ったが、勅許なく、また無断で長州藩の名を用いた脱走者として長州藩兵により征伐された。

「義挙」の訴えも聞き入れられず「暴挙」として長州から征伐されたこの「御許山騒動」は、明治維新をめぐるあまたの悲劇の一つであるが、

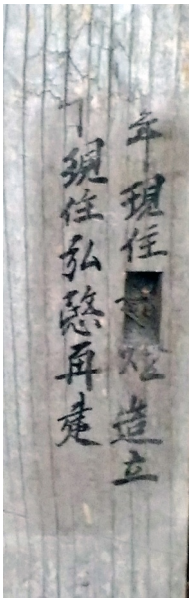


慶応四年に炎上した四日市別院本堂の図面
（日田市の竹内工務店所有）

そんな悲劇がこの四日市においても起こっていたということは感慨深いものがある。

勝福寺の本堂

ところで、御許騒動でも焼けなかった勝福寺本堂の建立年代は長らく定かでなかったが、平成六（一九九四）年からの改築の際見つかった棟木によると、第四代智燈［明和八（一七七一）年寂］の建立になるようである。



創建時の本堂は間口が四間半、屋根は草茸であったようだ。第十一代弘愍は弘化三（一八四六）年に改築を行い、草茸の屋根から切妻造の瓦屋根にしている。またこの時、手狭になった本堂を広くするため、南側の屋根にひさしをつけて一間のばし、西側の半間の廊下を内に取り込み、外陣と内陣をそれぞれ半間ずつ広げている。さらに東側の廊下を取り払って庫裡との間にお内仏の間を設け、多くの門信徒が参詣できるようにした。この時、現在の形が出来上がったのである。

戦中戦後の勝福寺

第二次世界大戦末期の昭和十九（一九四四）年には、北九州市にあった小倉陸軍造兵廠が爆撃を受け、移転先の一つとして四日市西方の糸口山に小倉陸軍造兵廠糸口山製作所が建てられた。勝福寺は本堂・庫裡とも軍に接収され、そこに勤労動員された鹿児島の旧制第七高等学校・造士館生徒の宿舎となっている。

また終戦直後には、勝福寺は住宅難となった人々の間借生活の場となったり、住職の両親、姉弟が結核や病気で次々と死去したり、門信徒も自分の生活で精一杯という状態で、本堂を維持する力のない時代が続いた。

第二次世界大戦は田舎のお寺にも深い影を落とし、本堂・庫裏の荒廃を随分と早めることになった。

本堂の改修

急速に老朽化が進んだ本堂は、雨漏りで西側が朽ち、庫裏にいたっては、二階から降り込んだ雪が階段まで積もる状態であった。

そうした中、高度経済成長で日本社会にゆとりができてきた昭和四十六（一九七一）年、門

信徒の力を結集して、ついに本堂庫裏の改修を行うことになった。しかしそれも予算的に限界があり、とりあえず雨漏りを防ぎ、窓をつけるという域を超えぬ工事であった。

昭和六十三（一九八八）年、第十七世住職（藤谷弘道）はその引退に当たり、本堂内陣の彩色を祈願した。門信徒の同意を得て仕上がった内陣は、創建時を超えるであろう見事なものになった。

ところが平成三（一九九一）年、数十年ぶりの大型台風となった台風十七号、十九号によって、本堂も庫裏も屋根瓦を吹き飛ばされてしまった。それを改修せんとするに、屋根地の痛みのひどいことが判明、ここに屋根を小屋組から一新する平成の大改修を行うことになった。工事は門信徒の皆さんの御懇念を受けて、平成六年から三年計画で行われ、平成八（一九九六）年十一月の総代会で工事の完成が報告された。

戦中戦後の勝福寺エピソード

1. 勝福寺の鐘も出征！

昭和十八（一九四三）年、戦局の悪化と物資の不足、特に武器生産に必要な金属資源の不足を補うため、宗教施設も例外ではなく、勝福寺の鐘や仏具も供出させられた。

勝福寺の鐘楼は門徒の外園績（いさお）氏の寄進によるものであったが、戦後、鐘がなくなった鐘楼は豊前の寺院に引き取られ、代わりに供出でなくなっていた本堂の仏具の寄進を受けた。

写真は供出のために宇佐郡の真宗寺院の鐘が、別院に集まった時の写真である。勝福寺の鐘は右から三番目の鐘である。

2. 勝福寺で卒業式

戦時中、勝福寺の本堂・庫裏には糸口山の陸軍造兵廠に勤労動員で来ていた旧制第七高等学校の生徒が寄宿していた。その生徒達は七高が空襲で焼かれたため卒業式ができず、卒業証書をもらえないままになっていた。

そのことが心残りであった彼らは卒業式をしようと話し合いを続け、戦後二十八年経った昭和四十八（一九七三）年、全国から五十五人が思い出の宿舎、勝福寺に集まった。

当時の教授五人も出席し、後藤弘毅教授（鹿児島大学名誉教授）が当時の浅野孝之・七高造士館長を代行して、羽織・袴の七高スタイルの卒業生に卒業証書を授与した。

このあと教授を囲んでコンパやファイヤーストームを行い、動員時代と同様に勝福寺の本堂にゴロ寝し、心ゆくまで若き日の思い出を語り合ったという。

旧制七高の動員学徒
28年ぶりに卒業式
思い出の地で〝青春〟語る
一宇佐一
若き日の七高生スタイルに戻って卒業証書を受ける卒業生＝宇佐市・勝福寺で